

卯の花の里だより

弘綱と一絃琴の調べ

加藤 正美

『新訂 佐佐木信綱先生とふるさと鈴鹿』（鈴鹿市教育委員会発行）に、佐佐木信綱資料館収蔵品として『すま琴譜（佐々木弘綱手録本）』が記載されています。また、『ある老歌人の思ひ出』（信綱著）には「一絃琴は、須磨にさすらへた在原行平が、流れ木を拾ひ、絃をかけて弾いたといふ傳説で、須磨琴というてをる。亡父が大阪にいったとき、眞鍋豊平翁から習った……」とあります。

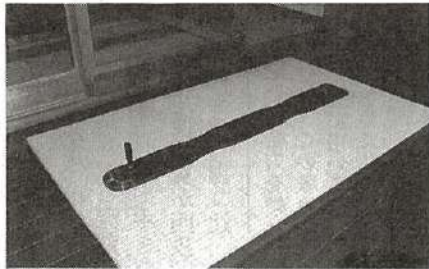
永川辰男さんは、収蔵されている琴譜をご覧になって、「弘綱翁が一絃琴を弾いていたことが確かになりました」と申されました。氏は桑名の神主で、伊勢一絃琴楽風会を主宰し、奏者として多くの人を魅了しています。

さて、北川英昭さんは石葉師寺近くにお住まいです。夫人のご実家、鈴鹿市西条の玉田家に一絃琴が蔵されています。貴重な短冊も。「うらやまし氏の玉田の玉よりもまさる宝をえたるころは 弘綱」。短冊掛としても使われた琴裏の和歌・句、その他の文書などから氏は考察を深め、信綱生前、玉田家御子誕生のお祝いに俳人、歌人、連歌師が集う、その中に弘綱もあり、そしてこの一絃琴が鳴ったに違いない、と推論されます。

暖かい晩秋の午後、資料館「思草」の間に、永川さんと北川さんをお呼びしました。



資料館所蔵『すま琴譜』



玉田家に伝わる一絃琴

永川さん「ほう、これが玉田家の一絃琴ですか」
北川さん「絃を張って、鳴る音色をいつか聴きたいのです」
永川さん「鳴りますとも、きっと」

十二月三日、顕彰会主催、「一絃琴の調べをあなたに」。北川英昭氏講演「幕末の鈴鹿地方における「一絃琴」。永川楽齋師の弾ずる一絃琴を聴く百二十人（芳名録記帳）」の中で、筆者は目を閉じ、この日会場の壁面に掛けられた玉田家の琴音を確かに聴いたのです。

（佐佐木信綱顕彰会会長）



目次

「寸錦帖」分描
展示室だより
信綱一首
卯の花の里だより

村田 邦夫
辻 正
村田 邦夫
加藤 正美

発行 鈴鹿市教育委員会
連絡先
・社会教育課 鈴鹿市神戸九一二一五
(TEL.〇五九三二八二一九〇三)
・佐佐木信綱資料館
鈴鹿市石葉師町一七〇七
(TEL.〇五九三二七四一三四〇)

「寸錦帖」分描

村田 邦夫

縁あって、石井宏氏の労作『モーツァルト』（原本フランス語。多年に及ぶ入魂の翻訳で、一九九九年度の収穫三種のうち丸谷才一氏は推している。）を贈られた。

もとより、楽譜も読めず、音楽の趣味も皆無な私にとって、全くただ、その精緻な文章に埋められた分量の大きさに驚き入る以外にはないのであるが、ただ一章だけまことに興味深く、メモをとりつつ精読したところがあった。

この若くして死んだ天才大音楽家を支えた「家計」の詳細な研究で、例えば「十代で教えていた三人の門弟から、いくらの謝礼を得ていたか」等の具体的な記述であった。モーツァルトの有名な「父」のことも、従ってこの章に詳しい。

そして、いまさらのように佐佐木信綱資料館が収蔵するおびただしい「そうした資料」群が絶えず心に去来した。これは、単なる好事のせんさくではない。信綱先生の業績

にとどまらず、その背景にあった明治大正昭和の文化史の支えをなした経済学的な考察のためにも、ないがしろには出来ぬであろう。

鈴鹿市教育委員会辻正先生と、三重大学教授岡義隆先生との多年にわたる地味な苦心が実って、信綱に寄せられた先輩知友門人らの葉書の集四冊の読解が完成刊行されたことは、鈴鹿市にとってまさに一九九九年度の特記すべき功績であった。人々は、今後繰り返し繰り返し、この一見片々とした小冊子の恩恵に感動することであろう。一例えば、信綱の先輩なる紅露追鶴とのなまなましい接点の資料としてなど。

いま、ここではただ一つのことのみにとどめる。それは、『寸錦帖』の中に高名な画家の名が、特に院展系の人々の名が、中でも特に安田軼彦一例えば、良寛旧宅から送った相馬御風の寄せ書きは、翌年発表された「五合庵の春」の画因となる一と、前田青邨との画入りのものが目立つ。これは共通のパトロンであった横浜の生糸商、原富太郎（三溪）との深い縁故によることを示す。信綱は、三溪が所有する藍紙本万葉集を紹介して世に知

信綱一首・15

山黙し水かたらひて我に教へ

我をみちびくこの山と水と

昭和二十六年(一九五二)刊、『山と水』所収

最終歌集を編むに当たり、信綱は死を意識して老いの全力を傾けた。その中心をなす熱海西山作の一連から。信綱は、この歌集の題を決めるために、『山水屏風』という密教で灌頂の法会に用いる貴重な仏教語を用意した。しかし、結局は哲学的な深意を密めた仏教語を捨てて眼前の凄寒な風景にやわらげた。その深い想いが、山と水との繰り返り返りとなって穏やかな声調を成したのである。生涯を代表する傑作の一首。装丁は共に文化勲章を授けられた横山大観、題字は親交の厚かった安田軼彦である。(村田邦夫)

られ、この人の客として宿った印度の詩人タゴールと語り、明治の傑僧・釈宗演と親交してその歌集を編んだ。

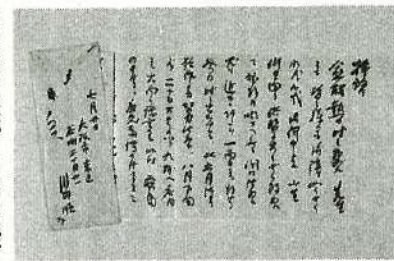
三溪は、官展に対する院展の支援に力めて、その私邸を若き日の下村観山・安田軼彦・前田青邨らに借しみなく画室として提供した。信綱は、そのサロンの一人として彼らにいつか古典の画題について語るに到る。そうした集いを、国宝「孔雀明王像」(現・東京国立博物館蔵)が静かに見下ろしていたのであった。

〔注1〕尾崎紅葉、幸田露伴、坪内逍遙、森鷗外のこと。余談 ①『寸錦帖』とは、小さいが尊い断片の意。「古聖は賢くもなお寸陰を惜しんだ。吾ら凡愚は、まさに分陰を惜しまねばならぬ。」父弘綱の訓戒もその底流にはあろう。

②信綱の文化勲章授章記念に刊行した『竹柏園蔵書志』の手鑑の項に同じく寸錦帖の名が見えるが、これは全く別のものである。おそらく信綱はこの写本のことを忘れていたであろう。抜群の記憶力と自他共に認めていたこの人の失念の一例としてほえましい。(この原稿は、平成十二年三月末に送られてきたもの。原文のまま。)

展示室だより これまでこの欄では、信綱に宛てられた手紙のうち九条武子、夏目漱石らを取り上げたが、今回は信綱門下随一の歌人で一面競争者でもあった(村田邦夫氏談)、また、その死に際しては葬儀委員長を務めた川田順のものを紹介したい。

拜啓 愈 酷熱の時と相成候(中略)例の通り俗務にあくせく致居候て旅行の暇さへ無く閉口仕居候(中略)此五月頃より歌作の方努力仕居候。八月下旬より二十日あまりの間九州へ。店用にて出向く予定に候。此時霧島のまはり、鹿児島湾のほとりにて二三日歌に親しみ候て三四十首は御笑覧に入れ度と考居候。先ず弘綱先生御記念祭の時の万葉集に関する御資料等 忝く拝受仕候。又「金鈴」も難有頂戴仕候。直に一読仕候へ共具體的に批評を書き候ほどアタマがまとまらず候。唯一読の印象にては、此作家と白蓮氏と境遇等大分似る点あるやうに候へ共歌としての力、熱は到底白蓮氏に如かずと存候。「金鈴」の作者は未だ歌に遊んでゐる処にて、自分のきも



信綱宛 川田順の手紙

の様に候。コレは必ずしも情の歌についてのみならず景の歌にても同じ事にて、あの境遇にある人としては、もつと「よき歌が出来ねばならぬもの」と存候。かかる断片的批評にては批評に成らず候ま、これは唯先生まで御ふくみ置被下度候。尤も斯様の一寸した印象にてもかまはず候は、御指図次第にて二三枚の原稿に致し差出度と存居候。なほ巻頭の写真は多過ぎると存候。一枚にて沢山と

存候。次に勝手乍ら(以下省略)。このあとは、『伎芸云大』以前の旧作、即ち竹柏園集第一編時代より『玉琴』に至る約十年間の作をまとめ『陽炎』と名付ける歌集を竹柏会出版部より刊行したいが、旧作を出版部の名で出すことは大変御迷惑かと存じ上げるが何とぞお聞き届けいただきたい。一度目を通していただき、取り捨て添削等を、又できることなら序文を頂戴できないかなど、次の歌集の出版についてのお願いでこの手紙は終わっている。

〔略注〕この手紙は、大正九年(一九二〇)七月二十日付 ①川田順(一八八二—一九六六)東京生まれ。父は宮中顧問官川田剛(豊江)。十六歳で信綱に入門、師事。木下利玄、新井洗と共に『心の花』三羽鳥と呼ばれ、大正初期の竹柏会を代表する歌人として歌壇を風靡した。戦後、皇太子(現天皇)の作歌指導にあたり、また宮中歌会始の選者となる。芸術院会員。歌集に『伎芸云』『陽炎』『鷺』など数多い。②当時勤めていた大阪住友本社の所用。③九条武

子の処女歌集で閨怨悲傷の一冊として、武子の名を世に知らしめた。④九条武子(一八八七—一九二八)京都西本願寺大谷光尊の二女として誕生。二十二歳で九条良致に嫁ぎ、外遊から帰ってからの独居十年。その間を歌に慰められた。歌は尾崎行雄の紹介で竹柏会に入門、信綱に師事。優雅な調べが主調で自己の孤独な境遇を歌いあげる。⑤柳原白蓮(一八八五—一九六七)本名宮島輝子。東京生まれ。柳原前光の二女。筑紫の女王とも呼ばれ、数奇な運命を辿った。初期は奔放な情感を華麗な表現に託して世に謳われたが、晩年は宗教的な平和への祈りがその歌に投影するに至った。⑥順は『心の花』(大九・九)で「夫人の歌はすなほで、大まかで、こせついでないし、さほど気取ってゐない」「芝居気も大して無い。これらのいい処ともっと深刻さとを両立してみせて下さい。」と。手紙の率直さ、手きびしさとは違い、やさしく評している。⑦肖像写真が四枚。

(鈴鹿市教育委員会社会教育課 辻 正)